私と僕の暗殺教室

宵季

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私と暗殺。」
「僕と教室。」

僕と私は正反対。

殺し屋：姉と情報屋：弟の正反対双子が、殺せんせー暗殺に挑むお話。

元々別サイトで連載していた夢小説を元に書いたものです。
こちらでの連載は初めてですので、何卒ご容赦を……。

一応女の子の方だけオチをカルマにしようかと思っていますが、男の子は現在友情エンド濃厚です。
さすがに一つの話でカップルふたつ動かす技量は今の自分にはないので・・・・。
ただ、別の番外編辺りで書く可能性はあります。
更新、とても遅いです。
２０２３／６／８　私と依頼人、一部文章追加しました。

目次

僕と私と依頼人たち
彼と依頼人 …… 1
私と依頼人 …… 11
僕と私の転校初日
磯貝と転校生 …… 21
私と校舎 …… 33
転校生と先生 …… 38
磯貝と新しい仲間 …… 46
磯貝と竹馬の友 …… 51
磯貝と呼び出し …… 61
私とカラスマさん …… 66
烏間と双子 …… 73
私たちと自己紹介 …… 77
渚と双子 …… 86

僕と私と依頼人たち

彼と依頼人

突如として部屋の中が暗闇に満ちる。
ソファーに座っていた女性、および両脇に控えていたガタイの良い男性二人が獲物に手をかけて暗闇の中での攻撃に備えた。
上か、後ろか、頼りにならない視覚の代わりに己の培ってきた感覚のみで部屋の中での変化を探る。変化した箇所が即ち『敵』の居所であるはずだと。
「あはは、そんなに警戒しないでくださいよ。白熱電球に寿命が来ただけですって。そんなんだからお役人は堅いとか言われちゃうんですよ。」
予期していたような変化はなく、パチ、と小さな破裂音と同時にぼんやりとした黄色い光が再び部屋を照らす。
そこには構えたままの姿勢で呆気にとられる三人と、その三人をテーブル越しににやけ顔で見つめる白い髪の少年がいた。色白の肌と洋風な顔立ちも相まって、ビスクドールがそのまま大きくなったかような印象だ。
しかし髪と揃いの色の長い睫毛に縁取られた緑色の瞳と僅かに色づいた唇が、自分よ

り年の離れた大人達がありもしない脅威に警戒する様を見て弓形になっている。その人間的な愉悦の表情が、彼が美しいだけの人形などではない事をありありと物語っていた。

うちっぱなしのコンクリート壁と天井。窓があるであろう場所をすっぽりと覆う真っ黒な遮光カーテン。

そんな殺風景というにはあまりに無骨過ぎる九畳ほどの応接間の中心には、高さ４０ｃｍ程の木製の机と、それを挟んで対になるように少年と女性が座る布張りのソファー。そのどちらも使用感が目立つ。

二人の間にぶら下がる黒い電力線を剥き出しにした白熱電球は、先程のように部屋を真っ暗にすることはなくとも、少年と共に喉でくつくつと笑って三人を馬鹿にするように小さな破裂音を鳴らし続けていた。

この部屋の中で唯一光源と言えるものはこのいたずら好きな電球しかない。

「……今まであなたに支払ってきた情報料の額を考えれば、たった一つの電球を買い換える余裕が無いほど困窮しているとは思えませんが。」

「愛着ですよ。こいつには太陽って名前もつけてるんです。可愛いでしょー？」

「随分と頼りのない太陽ですね。」

「つい最近７割も消えたせいで満月を見せてくれなくなった本物の月よりは、まだ僕は

信頼がおけますよ。」

そんなことを口では言いつつも、頭の中で少年は次の太陽候補について考えていた。勝手知ったる白熱電球か、ＬＥＤ電球か、いっそのことこの機会に天井を整備してリモコン式ＬＥＤシーリングライトでもつけようか。

「……今回の依頼内容はその月を７割も消した犯人についてなのです。」

部屋の中の太陽に思考が飛んだ少年に向かい、警戒態勢を解いて居住まいを正した女性が話題に上がった本物の月に纏わる話題を出す。彼女らにとってはこちらの話が本題であった。

少年の方はまさか自分が皮肉として出した話題がこう使われるとは思っておらず、少しの間面食らっていたが、すぐに聞く体制を整えた。もちろん頭の中での次期太陽候補選は急遽中断した。

「犯人っていったって、あれはつい最近の出来事でしょう。

もう自然現象か故意的なものなのかハッキリしてるんです？僕は自然現象説推してましたけど。」

「ええ。月爆破事件の犯人が自ら名乗り出ています。ですので、あれは故意的に引き起こされた大規模な事件です。」

「……その言い方だと、裏付けもせずに俺が月を爆破したぞ～って宣うヤツの言葉を鵜

呑みにしたって聞こえるんですけど。」

そういうわけじゃないんでしょ？と口外に少年が女性に問う。

言葉にしない言葉を正しく女性が受け取ると、裏付けと依頼内容を語る為の注意事項に入った。

「ここから先は国家機密の情報です。口外や取引の材料にすること等の情報の外部流出を厳しく禁じます。

もしもこれを破った場合、原則は記憶消去の手術を受けてもらうことになっていますが、その時の状況次第では……それ以上に厳しい処罰を受けていただくことも。」

「うわーすっごく嫌な予感する～。けど、了解しました。毎回別で相応の口止め料も頂いてるし、今まで通りリスクを背負いますよ。」

わずかに文句を垂れながらも了承した少年の前に、謎の目を光らせたタコ型キャラクターがでかでかと表紙を飾る『極秘暗殺依頼書』という冊子が置かれる。この時点で少年は自分の予感が思わぬ形で当たったことを察した。

その後の話の内容を簡単に纏めるとこうだ。

月爆破事件の犯人として目の前に現れたのは人語を解する巨大な黄色いタコであること。そのタコはマッハ２０で移動すること。そしてそのタコは来年の３月までに自身を殺さねば地球も爆破すると脅していること。成功報酬は百億円であること。

一つ一つの情報が現実離れし過ぎており、少年の頭にはすんなりと言葉が入らない。民法のオカルト系ゴールデン番組でも見てる気分だ。しかしそんな濃すぎる機密情報の中で最も度し難かったのが

「え、何でＵＭＡが中学校教師を？何で学校とクラスまで指定してきてるんです？」

「……分かりません。何もかも。本当に。」

女性の言葉が尻すぼみになっていき、最後には頭を抱えていた。少年も頭を抱えていた。

そんな二人を見て、護衛二人もなんとなく頭を抱えたくなった。

「うん、心中めちゃくちゃお察しします。僕も仕事柄色んな情報を扱うけど、未だにちょっとよく分かってないもん。

だから僕自身もそんな未確認超生物関連の情報は爪の先ほども知らなかったし、取っ掛かりが無さすぎてそこから新しい情報も探りにくい。岩じゃなくて砂の一粒を頼りにしてボルダリングするようなもんです。

いつもみたいに手持ちの情報を提供したり、潜入して情報を収集したりする形で、そちらさんの力になることはできないと思いますけど。」

「いえ。今回はあなた〝達〟に収集の依頼するべく赴きました。」

「……ああ、そっちですか。」

この言葉で少年は女性の言わんとする事を察した。
この店で、この少年にでなく少年〝達〟に、
情報の〝提供〟でなく〝収集〟を依頼することの意味。
「……聡明なあなた方のことです。当然分かっていて区別をつけているんですよね。
再三確認します。前回や前々回や前々前回みたいに〝僕に対しての〟依頼では無いんですよね。」
迷い無く首が縦に振られる。
「貴方たちに私立椚ヶ丘中学校3年E組の編入生として潜入していただき、既に任務に当たっている現地の生徒と現地に送り込まれる暗殺者への未確認生物暗殺完遂のバックアップ、及び対象の暗殺を依頼します。
こちらとしては、二週間後に作戦に入っていただきたい。」
それは簡単に言えば、殺しを伴う潜入依頼であることを意味する。
ただの情報目的での依頼ならば、少年のみへの収集依頼になる。そうなれば情報の収集が最優先事項となり、基本目立ちすぎる行動…殺しを伴わない仕事となる。
しかし、今回は少年のみでの仕事ではない。
情報の収集・提供が専門の少年だけでは成り立てない。殺しを専門にする、もう一人が必要なのである。

「この仕事の特殊な部分は、生徒であれば危害は来ない、とターゲットが明言している部分です。実際に生徒が何度か暗殺を試みて失敗しているようですが、特に報復行為もなく日常を送っています。」

「……つまり、仮に素性がバレても生徒である限りは即時失敗に繋がるものではないと？」

眉をしかめながら少年が問う。

「ええ。この3年E組は、ターゲットが何故か教師の仕事を欠かさず行うことから世界で一番殺せる確率が高い場所。我々政府による武器支給や技術提供などのバックアップも手厚い場所です。しかし学業が本業ですから、あなた方にも暗殺の傍ら学生生活を送ってもらうことにはなりますが。」

「……。」

少年は思案する。

１００億円の報酬や政府からのバックアップ、何より素性がバレようが仕留め損なおうがコンティニュー可能という部分は、これまで請け負ってきた仕事内容と照らし合わせてもかなり条件が良い。

その代わり難易度とリスクは現実離れしているが、受理しなかったからと言って確実に自分達が地球消滅というリスクから退避できるわけではない。

しかしそんな利益不利益の話以上に、学校生活という響きに彼は惹かれていた。
「期間はどのくらいなんです？全日制の学校に編入生としてってことは、仕事の期間は一日二日じゃないんでしょう？」
「とにかく手段も誰が行うのかも問わないので、確実にターゲットの暗殺を完遂してほしい。期間に関しては最悪タイムリミットに間に合えば良い、というのがこちらの要望と考えです。
よって期間は、ターゲットが地球消滅までのタイムリミットとして提示した来年３月まで。ですがもっと早期に暗殺が可能ならば、是非そうしていただきたく思います。」
「なるほど。そこの生徒と馴染んでから協力して殺すも良し、送りこまれる暗殺者と協力して殺すも良し、僕らが単独で殺すも良し。結果的にあの実在したＳＦを絶命させられればいいってワケですね。りょーかいです。お受けしましょう、その依頼。
もう一人には言っておくので、必要そうなものは後で」
「その前に、あなた方はご自分の戸籍はお持ちですか？」
言葉を遮られ、少年はわずかな不満に口をとがらせた。
「……僕たち自身のものはないですよ。でも、こちらの筋で横流してもらうなり借りるなりするのでそこはご心配なく。」
「いえ、今回の依頼では自身の戸籍を作って潜入していただきます。

学校側は、無戸籍および偽戸籍の人間を生徒としては受け入れたくないとのことでしたので。

急ぎ作成するものなので、名前を登録しただけの形のみの戸籍にはなってしまいますが。」

「あはは。きっちりしてますね、その学校。」

少年がしっかりと戸籍を作れといいつつ、そんなただ〝正規品〟というだけでほぼほぼ中身の無い戸籍で入学を了承した学校の矛盾性を皮肉な言葉で指摘した。

ふぅ、と短くため息をついた後、黒いパーカーのポケットに引っかけていた油性ペンとテーブルのしたに束で置いていた厚紙を取り出す。

きゅきゅ、と厚紙に二人分の名前を書くと文字が読める方向に紙を回して女性の方に差し出した。

「んじゃあ、戸籍作成用に僕の名前と姉の名前だけお渡しして、今回のお話は終了という事で。

この辺りはあんまり長居するものじゃないですし。まぁ、柔じゃないとは思っていますけど。念のため。」

厚紙を受け取り、女性がその文字に目を通す。

「…思えば、貴方たちの名前を初めて知りました。」

「あはは、ソレ偽名ですけどね。
あー……でも確かに呼称に当たるものを教えるのは初めてかも。
呼びたければその名前で呼んでもらっていいですよ。これから一年間くらいはその名前で色んな人に呼ばれるんでしょ、僕たち。今のうちに慣れとかないと。」
「……了解しました。では、そのように。
今回の依頼、受諾していただき感謝します。
道具の支給についても、また後日連絡させていただきます。
俵木　統也（わらき　とうや）。」
「あはは、早速使ってくれて嬉しい限りです。
道中お気をつけて～。」
そう言い去っていく黒服達の背を手を振って見送る。
パタンと閉じた扉を見つめながら、少年は依頼を受けたもう一人……片割れたる姉との二週間後に思いを馳せた。

私と依頼人

右、直線、左、右、道沿いに斜め右……

繁華街のまばゆい光をも入り込めないこの入り組んだ真っ黒な路地裏。その道筋に規則性はなく、それはさながら一つでも間違えれば二度と出ることのできない迷路だ。

それを己の夜目を頼りに、左手で荷物を引きずりながら進んでいく。

荷物にくっついているスタッズと、何年も整備されずにひび割れたコンクリートが、相成れないと言うようにギギギギと不愉快な声をあげた。こうして進んでいくほど、荷物の表面に傷が付いていく。

（確か待ち合わせ場所はこの辺りだったはず。）

依頼書の文面を思い出しながら進んでいけば、黒かった視界にわずかに赤みがさす。

この路地裏唯一の光源。日陰者にとっての太陽。間違いない、この先だ。

最後に道に沿い、角を曲がる。

狭い通路を塞ぐように置かれた赤い電気看板。光源の正体はこれだ。

そしてその看板が塞ぐ通路の向こう側に

「まあ驚いた。本当に時間きっかりだわ。」

ゴールドの腕時計から顔を上げた、依頼人と思しき女性が立っていた。
暗闇でも映える白い肌と深いスリットの入った扇情的なドレス、それに相対した清い少女のような愛らしい顔立ち。
電気看板の赤い光のせいで色は多少分かりづらいが、この女性が風俗関係の職に就いていることは彼女の服装と待ち合わせに指定されたこの店、そして首元のまだらで大方察することができた。
「頼めばグリップ並みの状態で請け負ってくれるって聞いたからどんな筋骨隆々が来るかと思えば、こんなに可愛い子だとは思わなかったわね。」
「ご冗談を。」
女性が私が後ろ手に持っていた荷物に気がつき、僅かに目を見開く。
「…最優先暗殺対象、暗殺成功しました。
こちらはこれで依頼を完遂したと認識していますが、これでよろしいでしょうか。」
今まで引きずり続けた荷物をずいと依頼人の眼前に持っていく。
すると依頼人は「うぅっ」と口を手で覆った。
しまったと思った刹那に、彼女の肩が震え出す。
時折いるのだ、慣れないその生理的な不快感から思わず吐瀉してしまうことが。
『この辺り』の人間だからと、かわされることがないように堂々と見せつける形にした

が、一瞬判断を誤ったかと焦る。
「うふふ…あはははッ！
ボロ雑巾みたいになってほんっと良いザマよ！
まるであんたに捨てられた直後の私のようだわ！」
と思った矢先。彼女のボルドーのラメに縁取られた丸みを帯びた形の良い瞳は、その悦と狂喜に瞳孔を開いていた。
ああ、本当に、楽しそうだ。
「ねえ、今どんな気持ちなの？
あらやだ、ごめんなさいねえ。雑巾には気持ちを感じることも出来やしなかったわよね。他ならぬあなたが言ったんだものね。」
うふふふ、あはははは。
暗い路地裏に、文字通り狂喜乱舞する依頼者の声が響く。
鈴のような声で紡がれる数々の呪詛。
マット地のリップで縁取られた唇はにやけが止まらないと言ったように清々しく、黄金比ともいうべき綺麗な形をしている。声と言葉だけが、ただただ異質で醜悪だった。
射抜かんとする程に凝視しながら怨嗟を吐くその様子は、彼女の執念深さを物語っていた。

言いたいことをぶつけきったのか。凝視をやめ、星の見えない曇った空を仰ぎながら高笑う彼女は憑き物が落ちたかのような笑みだ。彼女のその美しさより愛らしさの強い見目も相まって非常に画になる。

身体が擦り傷でボロボロになった『男の遺体』を見ての行動である、ということを除けばそのどこぞの絵画か写真の題材にでもなりそうな程に。

なるほど、今回はやはり私怨からの暗殺依頼だったようだ。

「ああ、すっきりした。

それじゃあこれが報酬。あんたに依頼するために死ぬ気で働いて貯めた金だけど、注文通りに無様な顔と体でコイツ連れて来てくれたから大満足だわ。

……ああ、そのボロ雑巾はその辺に捨て置きなさいな。もう興味ないわ。」

そう言うと彼女は胸元から取り出したぶ厚い茶封筒をこちらに投げ渡してから、もう興味ないというその言葉の通りにぷいっと踵を返して店の扉に手をかける。

「そうだ。あなた、もしフリーランスに嫌気が差すことがあったらうちにおいでなさい。顔もそっちの腕もいいなら、かなりの客がつくわよ。

笑顔の絶えないアットホームな職場だから。」

そう言って扉を引く。

赤以外が輝く光の中にただいまと気を張らぬ声で依頼主の彼女が言葉を投げれば、お

かえりと数名の女性と男性の声が返されていた。その重い鉄製の引き戸がバタンと閉めきられれば、そこからは店の内での声も光も一切分からなくなる。

あんなに遺体に釘付けで罵詈雑言を放っていたのに、帰るときは先ほどの攻撃的な笑顔の欠片も見せずにあっさりとしたものである。さながら仮面の脱着のようだ。

片手に元・最優先暗殺対象を持っているので、空いている方の手で袋の中身を確認すると、どうやら約束の報酬よりも少し上乗せされているようだった。

私はいつも通りに仕事をしただけで特別何をしたわけでは無いのだが、それだけ彼女の怨恨が深かったということだろう。

それにしても。

従業員であろう彼女の執着と無頓着の異常なまでの落差といい、

報酬受け取りの場所として指定された辺りといい、

この店は客も働き手も相当〝真っ黒な〟店のようだ。この異様な荷物を持って取引した光景を見られたとしても問題のない場であるということなのだから。

こんな迷いそうな路地裏にあって、日陰者の太陽などと大層な名称で通っている理由がよくわかる。

『その辺に捨て置いて』と言った彼女の言葉通りに、店から少し歩いたところにある長年収集に来られていないごみ捨て場のごみ袋の山の中に元・最優先暗殺対象を投げ入れ

る。

既にごみ袋の山の住民だったネズミたちが、次の新鮮な住処の襲来にちゅーちゅーと散っていった。

「やほ～お疲れ様～。

路地裏の光源と日陰者の太陽って、やっぱりエクリプスのことだったんだね。あの店本ッ当に質が悪いから、いくら姉さんだとしてもちょっと心配しちゃった。

あはは、でもその様子だと何事も無かったっぽいね。良かった良かった。」

背後から声。

振向くと、トウヤがいつもの作ったような笑顔ではなく、心の底から楽しいと言いたげな良い笑顔でこちらを見ていた。

それ故か、あははという癖付いた笑い方もいつもより少しは中身のあるものに思える。

しかし、この暗闇の中で白という色は本当によく映える。弟の白髪といい、先ほどの依頼主の彼女の肌といい、天然の持つ白とはとことん隠密に向かない。

「トウヤ、帰ってたんだ。依頼主には笑顔の絶えないアットホームな職場って言われたよ。」

「うっわそれ一番信用ならない職場紹介じゃん。」

「へぇ、そうなんだ。」
さすが名の知れた真っ黒店～といいながらトウヤが私の隣に並ぶ。
「なんだか珍しく楽しそうだけど、潜伏先で良いことあったの？ええっと、今回は２か月だったっけ。」
「んもー、３か月！
姉さんはもっと僕っていう可愛い弟がいないことについて興味関心を持ってよ！
トウヤは寂しいと死んじゃうんだよ？」
「冗談よりも、私の質問に対する答えを優先して言ってもらえる？」
冷ややかな目を作り、トウヤに向ける。
トウヤ本人もこの目が心の底からの嫌悪の産物ではないとわかっているようで、笑顔を崩さずにひるんだふりをした。
「あはは、分かったからそんな目しないでよ～。
詳細は家に着いてからにするけど、なんとなんと、僕ら姉弟で久々に依頼が来てね！
潜伏先は知らない人がいないレベルで超有名なあの場所！
冗談抜きで世界を救う、ロマンと非日常がごった返す超高難易度依頼！
成功報酬も過去最高額を記録！
ねぇ、何だかゲームみたいでワクワクしてこない？」

すごいでしょ、すごいでしょと言いたげなキラキラした目でこちらの反応を待つトウヤ。

肝心な部分を言わずに明らかに濁しているのは、私の興味を誘うためだろうか。それとも、どこで他人に聞かれているかわからないからだろうか。

この依頼も、仕事とあれば基本断らないスタンスの私のことを知っているから既に受諾したのだろう。

しかし、まぁ、どこに潜入しようがどれだけの難易度だろうがどれだけトウヤが冒険心をくすぐられようが、私にとってはいつもの通り仕事という名目であることに違いはないわけだ。

「へぇ。」

としか言いようがない。

「……。って、それだけ!?」

「要は二人して長期の仕事の依頼が入ってきたってことでしょう？

最長ってことは、もっと早期に完了することも可能って意味だろうし。

いくら要素として特殊なものが重なっても、結局のところ私たちが最終的にやらなきゃいけない事自体は今までと大差ない。」

「あー、期間についてはご明察。

だけども、いつも通り……にしては、対象があまり特殊すぎるというか、なんというか。

んーと、とりあえず帰ろっか。次の仕事候補のことだけじゃなくて、前の仕事の土産話とかもいっぱいあるんだよ！

姉さんに話したいことがいっぱいあるんだ。」

トウヤは私の前を駆け足で進み、どんどん道を曲がっていく。

そんなトウヤの忙しなくくるくると変わる表情と行動に思わずため息を吐いた。

そして、その溜め息はあくびに変わる。いつものことだ、住処に着くまではまだ動けるはず。これはきっとトウヤの言ういっぱい話したいことの最初辺りで、私は眠ってしまうだろう。ちょうどいい。

トウヤの姿を追う気のない私は、歩いて道を曲がる。

自身の長い髪もその行動に沿い、僅かに風にはためいた。

トウヤと違い、闇で映えることなく寧ろ紛れる黒髪。

歩行のペース、口数、請け負う仕事の種類、それについてのスタンス、更に表情筋の稼働率。

今更だけれど、私たちは正反対だ。

もちろん、だからと言ってあんなに喧しいトウヤのことを全く羨ましくは思わないけ

れど。

僕と私の転校初日
磯貝と転校生

「……な……の」
「……な……の」
「もう…さんってば……な・でしょ」
朝、いつものように本校舎から隔離された位置にあるＥ組校舎に向かうために山道を歩いていると、声が聞こえた。
どうやら上で誰かが会話をしているようだ。
一方の声は小さくてよく聞こえないがもう一方の声は男のもののようで、高めの活発そうな印象の声が鼓膜を僅かに震わせる。語尾の強さからすると言い合いをしているようにも思えるが、内容がわからない以上検討がつきにくい。
…にしても一体誰だ？
前原達と練った殺せんせー暗殺計画の下準備の為に、他のヤツよりも今日はかなり早く来たんだけど。
殺せんせーが来てからというもの、俺達椚ヶ丘中学校３年Ｅ組の生徒以外に国防省の

人達もここに出入りするようになった。だから知らない大人が校舎にいること自体はそう不思議なことではない。

でも、上から聞こえるこの声は防衛省の人達が纏う緊張感のある声や会話とは違って、こう、どちらかというと俺ら生徒が休み時間に談笑する時の雰囲気に近しいものだ。

覚えのある雰囲気ではあるけども、聞いた覚えはないその声色の主を確かめるためにも、俺は制服では少々歩きにくいこの山道を進んでいく。

少し歩けば木々に囲まれた視界が開けて、日光が声の主を照らした。

校舎の前に立つのは、クセの少ない長い黒髪を横に結んだ女子と少しふんわりとした癖毛の白髪の男子。二人とも肩に大きなスポーツバッグをかけている。

こちらに気付いた二人は会話をやめ、同じように山道を登りきったばかりの俺を見た。

俺の方に向けられた二人の顔立ちはどちらもとても整っていて、その影響で俺は一瞬仰け反りそうになった。

「あっ、もしかして君ここの学校の人？」

が、向こうから声をかけられたことで何とか体制を崩さず踏みとどまった。

笑顔で先に口を開いたのは男子の方。日本人にしては洋風な顔立ちで、もしハーフやクォーターと言われても納得するほどだ。

声の印象と同じく活発で親しみやすそうな雰囲気を纏っているが、それ抜きで顔だけを見ると白い癖のある髪と淡い光を持った緑色の瞳、それを縁取る髪と同色の睫毛のせいもあって儚げな印象も抱く。こういうのを浮き世離れと言うんだろうか。そういう意味ではイケメン、というより美丈夫ってやつなんだと思う。深い意味はないけど、ニュアンス的に。

鮮やかな緑色のパーカーを羽織り、黒い手袋とブーツを履いてはいるが、シャツ、ネクタイ、ズボンは俺と同じ椚ヶ丘の制服……ってことは。

「ああ、そうだけど‥‥。もしかして転校生、とか？」

正直この微妙で大変な時期に転校生が来るとは思えないし、もうすぐ転校生がくるなんて話も殺せんせーや烏間さんからは聞いていない。

だが椚ヶ丘の制服を着ているものの、ここの学校の人かと聞いたことを踏まえると本校舎の学生ではなさそうだ。

となると、時期外れの転校生の線しか残されていない。

「うん！大当たり！

楽しみだったもんだから朝早くに着きすぎちゃったんだよね、あはは。」

そう言って困ったように眉をさげて笑いながら頬をかく。

「あっ、最初に自己紹介するべきだったよね!?」

いけないいけないと言いながら、左手で女子の手を引いて今いる校舎の前から俺の方に小走りでやってくる。

女子の方は少し迷惑そうに整ったその顔をしかめた。

俺の前に着くと彼は荷物を地面に置き、空いた右手を差し出して満面の笑みを浮かべた。

「僕は俵木統也（わらきとうや）だよ！大統領の統に、地面の地の右側のやつで也。これからここに通うことになるから、よろしくね！」

ぱっと大きな花が咲いたような笑顔で握手を求める統也。

まっすぐ差し出されたその手に戸惑いつつも、よろしくと握手を返す。突然のことなのに、吸い込まれるように自然に俺の手が統也の手を握るために上がった。

握られた手を見ると、自分よりも統也の方が色白だと言うことに気づく。髪といい皮膚といい、全体的に色素が薄いようだ。

「そんでこっちが、俵木宵（わらきよい）。僕の双子の姉さんだよ！

双子で名字が一緒だから、僕らのことは統也と宵って、下の名前で呼んでね～。」

両手でずいっと背中を押され、女子・・・宵さんが俺と統也の間に立たされた。

「・・・俵木宵（わらきよい）です。よろしく。」

男子・・・統也の行動に不満があるのか、少々辟易とした様子で自己紹介をした宵さん

の方は和風美人、というのだろうか。可憐で女の子らしさがあるけれど、同時に強さもある雰囲気の顔立ちだ。

色味のない椚ヶ丘のシャツ、ベスト、ネクタイ、スカートを着用しているが、統也と同じ黒手袋とブーツを身に付けている。

高い位置で括った癖のない髪の色も黒で、

履いているデニール数の高いタイツの色も黒だからか露出がなく隙がない。そんなイメージを沸かせる。

表情があまり変わらず、口数が少ないせいか統也に比べると少し近付きがたく感じてしまった。

男と女。

白髪と黒髪。

洋風と和風。

笑顔と無表情。

双子だと言っていたけれどこの二人、全体的に正反対なのは気のせいだろうか。

いやでも男女ということは二卵性だから、別に不思議でもなんでも……

と、危ない危ない。

向こうが自己紹介してくれたならこっちも自己紹介をしなくては。

「俺は磯貝悠馬。ここ3年E組でクラス委員長をしてるんだ。困ったことがあったら、いつでも相談してくれ。」
「うわあ委員長さんだったんだ！イソガイくん、磯貝悠馬くんと。
うん、それなら遠慮なく頼りにさせてもらうね！」
「・・・・・・・。」
じゃあさっそく、と統也が前置きをして玄関を指差した。
「中に入りたいんだけど、どうやったら空くの？さすがに扉を蹴破ったり、ピッキングしたりするのはいけないよね？」
「あれ、まだ玄関空いてないのか？」
「うん。」
統也と一緒に、最初の『困ったこと』を解決しに校舎の玄関に向かう。
この時間なら、先生が玄関の引き戸の鍵を開けているはずだから建て付けが悪くなってしまったんだろうか。統也の鮮やかな緑色のパーカーの背を追う。
「・・・なんだろう、あの触覚みたいなの。」
先程から山の風にゆらゆら揺れる頭頂の二房の紙を見ながら
ぽそっと呟いた俵木宵の疑問は、弟の背を追った当の委員長の耳に届くことなく空気に溶けていった。もう・・・さんってば・・・・・な・・でしょ」

朝、いつものように本校舎から隔離された位置にあるE組校舎に向かうために山道を歩いていると、声が聞こえた。

どうやら上で誰かが会話をしているようだ。

一方の声は小さくてよく聞こえないがもう一方の声は男のもののようで、高めの活発そうな印象の声が鼓膜を僅かに震わせる。語尾の強さからすると言い合いをしているようにも思えるが、内容がわからない以上検討がつきにくい。

…にしても一体誰だ？

前原達と練った殺せんせー暗殺計画の下準備の為に、他のヤツよりも今日はかなり早く来たんだけど。

殺せんせーが来てからというもの、俺達椚ヶ丘中学校3年E組の生徒以外に国防省の人達もここに出入りするようになった。だから知らない大人が校舎にいること自体はそう不思議なことではない。

でも、上から聞こえるこの声は防衛省の人達が纏う緊張感のある声や会話とは違って、こう、どちらかというと俺ら生徒が休み時間に談笑する時の雰囲気に近しいものだ。

覚えのある雰囲気ではあるけども、聞いた覚えはないその声色の主を確かめるためにも、俺は制服では少々歩きにくいこの山道を進んでいく。

少し歩けば木々に囲まれた視界が開けて、日光が声の主を照らした。

校舎の前に立つのは、クセの少ない長い黒髪を横に結んだ女子と少しふんわりとした癖毛の白髪の男子。二人とも肩に大きなスポーツバッグをかけている。

こちらに気付いた二人は会話をやめ、同じように山道を登りきったばかりの俺を見た。

俺の方に向けられた二人の顔立ちはどちらもとても整っていて、その影響で俺は一瞬仰け反りそうになった。

「あっ、もしかして君ここの学校の人？」

が、向こうから声をかけられたことで何とか体制を崩さず踏みとどまった。

笑顔で先に口を開いたのは男子の方。日本人にしてはかなり洋風な顔立ちだから、ハーフ……なんだろうか。

声の印象と同じく活発で親しみやすそうな雰囲気を纏っているが、冷静に顔だけを見ると白い髪と淡い光を持った緑色の瞳、それを縁取る髪と同色の睫毛のせいもあって儚げな印象も抱く。

鮮やかな緑色のパーカーを羽織り、黒い手袋とブーツを履いてはいるが、

シャツ、ネクタイ、ズボンは俺と同じ椚ヶ丘の制服……ってことは。

「ああ、そうだけど・・・。もしかして転校生、とか？」

正直この微妙で大変な時期に転校生が来るとは思えないし、もうすぐ転校生がくるな

んて話も殺せんせーや烏間さんからは聞いていない。
だが椚ヶ丘の制服を着ているものの、ここの学校の人かと聞いたことを踏まえると本校舎の学生ではなさそうだ。
となると、時期外れの転校生の線しか残されていない。
「うん！大当たり！
楽しみだったもんだから朝早くに着きすぎちゃったんだよね、あはは。」
そう言って困ったように眉をさげて笑いながら頬をかく。
「あっ、最初に自己紹介するべきだったよね!?」
いけないいけないと言いながら、左手で女子の手を引いて今いる校舎の前から俺の方に小走りでやってくる。
女子の方は少し迷惑そうに整ったその顔をしかめた。
俺の前に着くと彼は荷物を地面に置き、空いた右手を差し出して満面の笑みを浮かべた。
「僕は俵木統也（わらきとうや）だよ！大統領の統に、地面の地の右側のやつで也。これからここに通うことになるから、よろしくね！」
ぱっと大きな花が咲いたような笑顔で握手を求める統也。
まっすぐ差し出されたその手に戸惑いつつも、よろしくと握手を返す。突然のことな

のに、吸い込まれるように自然に俺の手が統也の手を握るために上がった。
握られた手を見ると、自分よりも統也の方が色白だと言うことに気づく。髪といい皮膚といい、全体的に色素が薄いようだ。
「そんでこっちが、俵木宵（わらきよい）。僕の双子の姉さんだよ！
双子で名字が一緒だから、僕らのことは統也と宵って、下の名前で呼んでね～。」
両手でずいっと背中を押され、女子・・・宵さんが俺と統也の間に立たされた。
「・・・俵木宵（わらきよい）です。よろしく。」
男子・・・統也の行動に不満があるのか、少々辟易とした様子で自己紹介をした宵さんの方は大和撫子、というのだろうか。可憐だが凛とした雰囲気の顔立ちだ。
色味のない椚ヶ丘のシャツ、ベスト、ネクタイ、スカートを着用しているが、統也と同じ黒手袋とブーツを身に付けている。
更に黒のデニール数の高いタイツを履いているので、露出がなく隙がない。そんなイメージを沸かせる。
表情があまり変わらず、口数が少ないせいか統也に比べると少し近付きがたく感じてしまった。
男と女。
白髪と黒髪。

洋風と和風。
笑顔と無表情。
双子だと言っていたけれどこの二人、全体的に正反対なのは気のせいだろうか。
いやでも男女ということは二卵性だから、別に不思議でもなんでも……
と、危ない危ない。
向こうが自己紹介してくれたならこっちも自己紹介をしなくては。
「俺は磯貝悠馬。ここ3年E組でクラス委員長をしてるんだ。困ったことがあったら、いつでも相談してくれ。」
「うわあ委員長さんだったんだ！イソガイくん、磯貝悠馬くんと。
うん、それなら遠慮なく頼りにさせてもらうね！」
「……。」
じゃあさっそく、と統也が前置きをして玄関を指差した。
「中に入りたいんだけど、どうやったら空くの？さすがに扉を蹴破ったり、ピッキングしたりするのはいけないよね？」
「あれ、まだ玄関空いてないのか？」
「うん。」
統也と一緒に、最初の『困ったこと』を解決しに校舎の玄関に向かう。

この時間なら、先生が玄関の引き戸の鍵を開けているはずだから建て付けが悪くなってしまったんだろうか。統也の鮮やかな緑色のパーカーの背を追う。

「・・・なんだろう、あの触覚みたいなの。」

先程から山の風にゆらゆら揺れる頭頂の二房の紙を見ながら

ぽそっと呟いた俵木宵の疑問は、弟の背を追った当の委員長の耳に届くことなく空気に溶けていった。

私と校舎

「・・・ん？空いてるけど。」
「ええっ、嘘だぁ!?・・・・・・あー、なるほど。引き戸、だったんだ。」
「だから押しても簡単に開いてくれなかったんだね。統也さっき顔面打ってたし。」
「わー！わー！
結構恥ずかしかったんだからさらっと僕の失態暴露するのやめてよね!!」
二ヶ月・・・じゃなくて三ヶ月間のアメリカでの潜入依頼の影響で、どうやら統也は引き戸式の存在を忘れていたらしい。
先程「学校へ突入ー！」と言ってそのままガツーンと頭突きをした時の統也の呆けたような背中を思い出して、少し笑いが込み上げてきた。あの様子だと素で突入するものを間違えたようだったから。
〈・・・統也、扉に突入〉
〈言わないで、それ以上。〉
〈これで大騒ぎって、馬鹿なんじゃないの。〉
〈馬鹿って！姉さんってばよりによってその言葉選びはないでしょ!?〉

あの慌てぶりと、直後に磯貝君が来たときの「助け船が来た！」と言いたげな顔は中々見物だった。

「それは・・・・転入早々災難だったな。怪我はないか？」

「大丈夫、僕にも扉にも怪我は無いよ！

うへえ、磯貝君ってば対応もイッケメーン！

うん、やっぱり心配してもらえるってちょっと嬉しいかも。」

当て付けか。それは馬鹿じゃないのと言って心配をしなかった私への当て付けなのか。

「統也、もし宣戦布告だって言うなら受けて立つけど。」

「ううん、物理的に勝てる気がしないからやめる。」

即答だった。

「はは、お前ら姉弟の力関係が少し分かった気がするよ。とりあえず玄関は開いてたからさ、中に入れるぞ。」

そう言って磯貝君は残りの扉を軽々と開ける。引き戸だと分かれば誰でも簡単にできることではあるが、先程の統也を思い出すとこうやって軽々と扉を開けること自体が少し凄いことに思える。

どうぞ、と玄関の扉に手を掛けた磯貝君に先に入ることを促されたので、彼の気遣い

に甘えて一番先に校舎の中に入る。次に統也、磯貝君と続いて入ったようだ。
外から見ても老朽化が進んだ建物に思えたが、中から見ても木材が一部腐敗している所が見受けられるくらいにはボロボロだった。
私たちの暮らすあの建物よりも築年数が多そうだ。
でも目に見えて暗くて冷たい雰囲気のあそことは違って、木造だからなのか日のあたりが良いからなのか
ここは古くても暖かい、そんな風にも思えた。
……ああ、これは、なんだか落ち着かない場所だ。
「うへぇ、中は意外と普通だ。」
「ちょっと廊下の板も軋んでるみたいね。これくらいなら流石にすぐに抜けたりはしない…と思うけど。」
「うん、まあ、E組だからな。」
「……そっか。」
ぽつりと呟かれた磯貝君の言葉に違和感を覚える。先程にはなかった後ろめたさが彼の声色の中に見えていた。
E組だと、校舎が古いの？
『未確認超生物が何故ここを指定したのかを知りたい』と先にこの学校について情報を

集めていたらしい統也は

、E組だから、校舎が古い事について言葉の上で納得の意を示して、磯貝君にそれ以上のことを聞くようなことは無かった。

正直私は聞きたかったけど、振り向いた先にいた統也に目で『いけない』といわれたので詮索するのはやめた。統也は何か知っているようだから、後で聞いてみよう。

「ところで職員室ってどこ？

教室行く前に転校生が最初にする事っていったらまず先生への挨拶だよね？」

「うーん、俺は転校したことないからよく分からないな。ああ、職員室はこっちだからついてきてくれ。

……ところでさ、担任について何か聞いたりしてるか？」

ついてきて、と言って僅か二歩ほど進んだ辺りで少しだけ振り向いた磯貝君が私たちに問う。

担任について、というと標的についての情報のことだろう。

それにしても彼のこの反応。案の定、騙されている、みたいだ。

「一週間前くらいに防衛省？だったかな。

そこの人たちが訪ねてきたの。そこで大体の事情は聞いたよ。」

「一応写真も見せてもらったし、僕らは担任が黄色いタコってことも知ってるよ。

ありがとね、僕らのこと心配して言ってくれたんでしょ。」
「ああ、知ってるんならいいんだ。さすがに事前説明なしでうちの担任見るのは、な。」
まるで、私たちを〝一般の転入生〟だと思っているようなこの反応。
こんなにおかしな時期に来る転校生なんて、普通ではないと察することなんて容易に出来そうなものなのに。
それでも眼前の彼がその結論に至れない最大の要因は
「あはは。大丈夫、見る覚悟は決めてきてるから叫んだりしないって！」
十中八九、この統也の術中にはまっているからだろう。

転校生と先生

「でたあああああああああああああ！」
「にゅやあああああああああああああ!?」
統也と宵さんを連れて職員室前につき、入室許可を得て職員室の扉を開けるとその直後に統也の叫び声が響いた。
見る覚悟どこ行った。
「思ったより身長が大きいし触手も太いんだね。
ずいぶん空気抵抗が高そうなフォルムだけど、本当にマッハ２０もでるのかな。」
宵さんは叫ぶことなく冷静に殺せんせーの容姿についてぽつぽつと疑問を呈していた。
こっちは逆に冷静過ぎてびっくりする。
「か、かかか、開口一番に〝出た〟なんてお化けでもないのに失礼じゃないですか!!先生も思わず釣られて悲鳴を上げてしまいましたよ！
にゅやぁ……。こういうのは第一印象が大事だというのにぃ……。」
「おっ、おおおお化けじゃなくても生ＵＭＡなんて誰だって悲鳴上げますって！

寧ろこうやって質量持って実在してる分お化けよりも怖いですって！」
俺の目の前に初めての生ＵＭＡを冷静に分析してた女の子がいるけど、それは良いんだろうか。
そう思って視線を宵さんの方に向けると、ちょうど向こうも顔はほとんど正面だが、少しだけ振り返って目線をこちらにやっていたのでばっちりと目が合った。統也とは違う深い紫色の瞳が、じっとこちらを見やっている。
俺が見られていたことよりも、正面よりも睫毛の長さがよく分かる、流し目の宵さん自身があまりに画になりすぎていて一瞬どきりとする。
それが顔に出ていたのか、若干宵さんが眉をしかめたように見えた。悪いことはしていないはずなのに、何だか申し訳ない気持ちになる。
「うっへえ～磯貝君ってば、よくぞ正気を保ってあの先生の前に立てるよねぇ。」
「これはもう慣れ、だな。」
宵さんから、俺の名前を出した統也の方に視線を移す。
……正直宵さんに抱いたふわっとした申し訳なさから逃げたかったので、不謹慎だけどちょうど良かった。
「あ、そういえば先生って名前あるの？」
「ええ。是非とも私のことは、殺せんせーと呼んでください。先生と殺せない、という意

味の殺せんで殺せんせーです。」
「殺せん先生で殺せんせー。うっわー名前の由来の時点で高等生物って感じ。
ああ、そうそう！知ってるかもだけど、僕の名前は俵木統也です！」
「俵木宵です。えっと、よろしくお願いします、殺せんせー。」
「よろしくね～殺せんせー！あっ、そうだ！」
名前の話題から、ぽん、と用事を思い出したように統也が手を叩く。殺せんせーが先程の騒がしさとは打って変わって「にゅ？」とデフォルトのにやけ顔で統也の言葉を待つ。
「ねーねー！磯貝君、先生ぇ……って、あっ!!」
統也の「とんでもないことに気付いた」と言わんばかりの間抜けとも思える大きな声が、部屋中に、いや校舎中に木霊した。
反射的に体が強張り、統也に俺の意識が集中する。
その、一瞬だった。
視界で黄色い何かが弾けて、木の床にぺちゃっと落ちる。
ビチビチと奇妙に動くそれが切り離された殺せんせーの触手である、という結論に至るまでに俺は体感長い時間を有した。
だって、殺せんせーがダメージを受けることなんて、初めてで。

切られた殺せんせーの残った方の触手を視認すべく、俺は床から先生に視線を移す。
が、そこでの光景もある意味異様だった。
向かって右後ろの殺せんせーの触手が一本、半程から切り落とされている。
もう一本、切られたものとは別の手にあたる触手では、
先程俺の目の前にいたはずの宵さんがこちらに左手を突き出して何かを握り潰したような形で両手両足を他の触手で拘束されていた。
拘束といっても纏め上げられたような拘束ではなく「動きそのままの形で、それ以上は動かせなくする」という風な拘束の仕方だが。
突き出された左手の手袋には、粘液が付着していた。
「あは、超生物に一本やれたらさ。まぁ上出来じゃない？」
「……!?統也!」
統也の方も、宵さんと同じく動きそのまま、という風に両手両足に殺せんせーの触手の拘束がなされていた。
こちらは左足を蹴り上げたような恰好で。
「……なるほど、中々シンプルでそれでいて上手い手ですね。君たちの技量の高さが伺える。」

統也の大声をキッカケに様変わりした光景と空気に、俺は全くついていけずにただ呆然と光景を見ていた。
「先生、生徒に危害は与えない約束なんでしょう？
この体制のままなのは辛いから、そろそろ私たち二人共離してくれると嬉しいのですけど。」
「ええ、もちろんですとも。」
するするすると統也と宵さんに絡まっていた触手が解かれる。
ふぅ、と息をつく統也と、左手の粘液を振り払う宵さん。今ならわかる。この二人は、あの一瞬で殺せんせーを暗殺しようとした。
しかも、あの先生にダメージを与えた。
「あはは、ごめんね磯貝君。めちゃくちゃびっくりさせちゃったでしょ。」
笑い混じりの困り顔でこちらに謝る統也。
あんな光景を見せられたのに、こんなに思考は上手く働いていないのに、俺は未だ統也に対して一切の恐れに似た感情を抱いていなかった。
ああ、恐れてはいない。でも、その統也に恐れを抱かないという事実がどこか気持ち悪くもある。
「まず最初に、あなた達の身につけている手袋と靴。それと統也くん、君の着ているその

パーカーも。私にダメージを与えられる素材のものですね。
いやはや、ナイフと銃弾だけでなくこんなに早くに衣服にも対先生物質を応用するとは。
にゅるふふふ、政府も中々頑張っていますねぇ。」
「でっしょー?-本当にこんなんが対抗手段になるのかって疑ってたんだけどね。僕らのこれがプロトタイプなんだってさ。
……まぁ今先生に知られちゃった以上、強みも大分薄れちゃったんだけど。」
対先生物質については俺らも知ってる。政府から支給されたナイフと銃弾にそれが使われているし、その効果も先生が実演済みだ。
でも、彼らのように衣服の形でそれが使われているのを見るのは初めてだった。
「統也くんが会話の中心発言者として注目を集めている状況を作り、あっ!というその声とタイミングで更に瞬間的に意識を統也くんに強く向けさせる。我々が完全に統也くんに意識を向ける一瞬をつく、気配を完全に消した宵さんの不意打ち。そのコンマ一後に統也くんがもう片方を潰しにかかる。
しかも宵さんあなた、その前はすぐに不自然に気配を消さずに布擦れなどを使って徐々にフェードアウトしていきましたね。統也くんに我々の意識が向く強さに合わせて、ごく自然に。

おかげで先生も思わず触手を一本取られました。」
先生の解説を静かに二人は聞いていたが、説明し終わると統也は気まずそうに頬をかき、宵さんは目をわずかに見開いた。どうやら図星のようだ。
この打算だらけの行動が全て俺の知らぬ内に行われていたのだと思うと、ただただ驚いてしまう。
「しかし、その後先生の触手を狙うルートの足場に壁を選んだのはいけなかったですねぇ。ほかの建物ならまだしも、ここは老朽化の進んだ木造。足を付いた時の軋みが大きいので、すぐに居場所が分かってしまいますよ。
宵さんの素晴らしい跳躍力とバランス力あってのルート選択ですね。普通の人間ならこうはいかないでしょう。
まぁ、床や天井を選んでも同様の理由で先生を殺すことは出来なかったでしょうがねぇ。」
「驚いた。ルートから足場まで正確に割れてるなんて。」
ここまでのものを見せられて二人の正体に思い至らないはずがなかった。
寧ろ何故今まで気がつかなかったんだろうか。
俺がそれに気がつかなかった事すらも、これら打算のうちの一つでは無いかと勘ぐってしまう。

思えばおかしい話なのだ。
この椚ヶ丘中学に転入生が早々にE組に姉弟揃って落とされること。
よりにもよって、この時期に転入生が来ること。
きっと、この二人は
「歓迎しますよ。俵木宵さん、俵木統也くん！
プロの刺客として、私の生徒として。」
普通じゃない。

磯貝と新しい仲間

俺は3―Eの教室に着くまでの途中、二人のことを聞いた。
二人とも政府からの要請でここに俺たちのサポートをしに来たこと。
統也は情報収集が得意で、宵さんは実戦の方が得意なこと。
それと、さっきまで統也が俺に対して印象の操作を行っていたこと。
最後の事に関してはすごく謝られた。
話を聞くにさっきの襲撃の時に、俺の様子が変だということで殺せんせーに攻撃を感づかれないようにするのが目的だったようだ。俺自身暗殺成功の為と納得したし、特に怒ってもいないけれど、統也曰わく「誠意」らしい。
「いつもの仕事ってさ、僕が僕以外の全く違う誰かになって仕事するんだ。例えば成人済みの会社員とか、図書館の司書さんとか。でも今回の僕らは違う。俵木統也として、俵木宵として、自分がどういう目的でどういう素性しているのか。それを明かしてこの仕事に就いてる。
いくら味方だって言っても、情報屋とか殺し屋とか言われたら君たちめちゃくちゃ怖いんでしょ？しかも僕が騙してたから、本来感じるはずの恐怖を磯貝君は感じることが

出来なかったはずだし。
例えばさ、ニュースで流れた猟奇的殺人事件の犯人が自分が知ってる優しい近所の女性だったってなったらさ。
自分達が知ってたその人の優しいいつもの顔と、自分達が知らなかった殺人を行う猟奇的な顔の二面性に恐怖するよね。
『危機は近くにあった』『その恐怖が見えていなかった』って。
僕が最初磯貝くんに見せたのはその女の人で言う優しいいつもの顔の部分にあたるし、暗殺の時に見せたのは猟奇的殺人鬼の顔にあたる。
猟奇的殺人鬼の顔を知ってしまったら、優しい顔を知っていた分その人の事も信じられなくなるし、何よりもそれに気付けなかった自分自身のこともきっと信じられなくなる。
……僕はそれを知っているのに、そっちの方が自分たちに都合がいいからってわざと磯貝くんにそれをしてしまった。
だからさ、本当にごめんね。」
そう言って俺の言葉を待つ統也はこの数十分の中でずっと見せていたあっけらかんとした明るい表情を欠片も感じないほどに悲痛だった。
「そんな顔するなって。

寧ろ俺は二人のこと心強いと思ったよ。俺ら、暗殺なんて初めてだし不安なことだらけだし。日に日に、この先生は本当に殺せるのかって思う出来事ばっかだし。

これからの暗殺、あんなことができるおまえ等二人が味方だって思ったらめちゃくちゃ心強かったんだ。

だから全然いいよ。寧ろそういう暗殺に関わる目的で騙されるんなら本望だ！

改めてよろしくな、二人とも。」

突然やってきた、同い年のプロの情報屋と暗殺者。

もしかしたらこの言葉も表情も、また何かしらの目的を持って作り出した打算的なものなのかもしれない。現に彼を目の前にして言葉を交わしても、自分の判断や感覚なんて全く役に立たなかった。

それでもと思ってしまう、信じたいと思ってしまう魅力が今の統也にはある。自身が今感じているこの感覚と、疑念という相反した感覚を持ち続けたままでは双方から引き裂かれるだけだ。それなら、クラスメイトとして信じる方が良いと思った。

どちらにしても、殺せんせー暗殺の目的は一緒なわけだし。

「い、い、磯貝くぅん～！

想像以上にイケメンだぁ～!!」

「ちょっ、統也!?」

「あ。」
　先程の悲痛な表情から一変、表情が明るくなった統也にぴょーんと抱きつかれてぐらりと体が揺れる。
　左に大きく傾いた体は統也の重みを乗せたまま床に打ちつけられる……ことはなかった。
「ごめんね、磯貝悠馬。トーウーヤー。」
「いやはや本当に申し訳無いね磯貝くん。何度も何度も。いやホントに。マジで。
　この仕事の前は3ヶ月間アメリカに行ってたから、なんかオーバーリアクションの癖が抜けなかったって言うか。アメリカンにアグレッシブに行きすぎたって言うか。」
　緑色の瞳は俺と宵さんどちらでもない明後日の方向を向いている。早口で言い訳をする姿は、どこか頼りない。
「統也、言い訳はいいからさっさと退いて。磯貝悠馬にずっと負荷かけてるつもり？」
「早急に退きます。」
「よろしい。」
　倒れそうだった先にいた宵さんがバランスを崩した俺の背をひっつく統也ごと支えてくれていた。大の男子二人をけろっとした顔で。
　服の上から見た限りはかなり細い子だけれど、今の支えの力強さと安定感は半端じゃ

なかった。さっきの実戦が得意という話や殺せんせーの話からして、フィジカル面に優れているのかもしれない。

……なんだか男として不甲斐ない気分になってしまう。

「正直、君がここまで好意的に受け入れてくれると思ってなかった。だから、私も統也があんなことした気持ちは分かるの。気持ちだけ。

改めてよろしく頼むね、磯貝悠馬。」

起こした後、俺の背中の制服のシワをぽんぽんと優しく延ばしながら宵さんは言った。

先程殺せんせーの触手を初めて破壊したその手の平が今俺の背を撫でていることに妙な感覚を覚える。

「ありがとうな、宵さん。

ほら、あそこの3―Eってかいてある扉のところが俺らの教室だ。」

職員室から教室までの短い道中。

俺は新しい3―Eの仲間を連れて、教室についた。

磯貝と竹馬の友

「にしたって納得いっかなーい！こっちは一応触手全部切り落とす気でいたのにさ！」
３年Ｅ組の教室内にて。
俺ら三人以外はまだ誰も来ていないので、統也一人の不満げな声だけが反響している。
俺の机に肘をつきながら『８秒チャージ！ｏｎゼリー』と大きくプリントされたパウチをふてくされながらぢゅーと吸い込む姿は、先程殺せんせーを暗殺しようとした時よりも随分と幼い。
殺せんせーから対先生素材で作られていると言われていた緑のパーカーのフードを被りながらふてくされて食事をする光景を見て、なぜか『はらぺこあおむし』という単語が頭をよぎる。
「統也、気持ちは分かるけど飲みながら叫ばないで。飛ぶから。」
姿勢を正しながら『ザキヤマ　スウィイトプゥルロール　メイプル味』を黙々と食べていた宵さんは、咀嚼していたそれをきちんと嚥下してから統也に苦言を呈した。
宵さんの所作は基本的にスマートというか洗練されていて、だら～と効果音の付きそ

うな統也との対比を更に濃くしている。

ちなみに宵さんは既に

『ＰＯＰＶＡＬＵＥ　比較的おっきめのメロンパン』

『ザキヤマ　粗く引いたフランクをフルトしたパン』

『ザキヤマ　白い愛人コラボ　もちもち柔肌触感ロール』

『ｉｔ　焼きそばパン～パンに焼きそばを挟んでみたらダブル炭水化物なのに意外といけた件について～』の四つを完食済み。

つまり今食べているパンは五つ目。

あんなに勢い良くゼリー飲料を飲む統也ですらまだ二個目なのに……。

二人が持ってきていた大きなスポーツバックの中身はほとんどが二人用のパンやエナジーゼリーだったようで、教室に入って職員室で殺せんせーから言われていた自分達の席を決めてからすぐに鞄を開けて一つ目を食べ出した。

二人の新しい席については机と椅子の運び出しを先生が既にしてくれていたようで、曰わく

「とりあえず一番後ろの列に新しく5セット置いたので、お好きなところにどうぞ。一年間使う場所ですし、授業的な意味でも暗殺的な意味でもプレビューは大事ですからねぇ。

あ、でも一番廊下側は既に寺坂君が使っているのでダメですよ!そこだけは注意です!席のダブルブッキングだなんて、管理が杜撰なコンサート運営じゃないんですから!」

とのことだった。

コンサート運営の下りに関しては異様に憤っていたけど前に何かあったんだろうか。

あんな常識外れの見た目をしているくせに人が多かろうがおかまいなしにどこにでも赴く殺せんせーのことだし、その杜撰なコンサート運営とやらに当たったのかもしれない。

一番後ろの席、つまり前から五列目には先生が言ったとおり、見慣れない五つの机が並んでいた。

宵さんは真ん中の列の左側を、統也は廊下側の列の左側を選択していたが、正直二人が隣同士ではなく一席空けての席を選んだことは意外だった。

宵さんは「窓際だと眠る時に日光が入って来やすいから眠りづらいの。廊下側は右側に既に人がいるから、隣のスペースに空き椅子を置いて横になることが出来ないし。だから消去法で真ん中にしたの。」とのこと。

統也の方は「姉さんは寝る時に右側を下にするんだ。僕が隣の席にいたら、姉さんは寝る時に右隣の机の椅子を清々使えないでしょ?姉さんの睡眠を阻害する要因は僕自

身であっても断たなきゃ！」とのこと。

……宵さんが授業中に居眠りすることを前提にして話が進んでいたのはこの際気にしないことにした。

いやまぁ、クラス委員長としては気にするべき案件なんだろうけれど。なんだか、至極当然という風に話を進める彼らに対して止めても無駄だなと感じていた。

一応統也の方には、正面よりも少し斜めの方が対象の細かい動きが観察しやすいこと。利き手が左手なので、対先生銃を使用する時に窓側よりも廊下側の席の方が方向的に殺せんせーを狙いやすいこと。

と、このように合理的で至極真っ当な理由もあるようだったけれど、理由説明の際に宵さんの睡眠がらみの理由の方が熱が入っていたのでやはりそちらの方が主だった理由なんだろう。

うちのクラスの席の法則として男子は男子で、女子は女子で縦列が固まるというものがある。　しかしそれの法則性を破って、例外としてこの二人にだけ好きな位置の席を選ばせたことには、殺せんせーのどんな意図があるんだろうか。

二人は一般の生徒ではなく、プロの暗殺者。先程の職員室での一件で新しく判明した事実。これは暗殺だなんてさっぱり無縁だった俺達には願ってもないことだ。さっきの職員室の一件でも、二人の凄さが十二分に分かった。

この二人は俺たちなんかよりも遥かに殺せんせーを殺せる確率が高い。つまり、殺せんせーがこの教室内で最も警戒するべき相手だ。なのに先生は、そんな二人に好きな席を選ばせた。好きなように、自分を暗殺しやすいと思える場所を。一体どうして。

疑問ばかりが増えていくが、それについての明確な答えは今考えてもわからないような気がした。

二人が決めた席に目印として互いに筆箱やノートを置いて、席決めは完了。

俺の席の場所を教えると自分の席の椅子を持ってきて俺の机を囲むようにして座り、スポーツバックからゼリー飲料を取り出して今に至る。

「磯貝くんも食べて。私たちだけが食べてるんじゃなんだか申し訳なくなっちゃう。」

「ああ、ごめんな。そういうことなら遠慮なくいただくよ。」

俺も二人から場所代だと言われてありがたく貰ったいくつかのパンのうちの一つ『ｉｔ　ピリッとスパイシーマヨチキンロール』を開ける。残りの甘いパンは母さんや弟妹たちにお土産で持って帰ろう。ちょうどシール付きのキャラクターもののパンとかもあったし。

「やっぱり怖いよねぇ。僕たちのこと。」

統也が最後の一口を飲み込んで、白いビニール袋に薄くなった空のパウチを突っ込みながらあっけらかんと言う。

「そんな」

そんなことはないと言おうとした。

だって俺は、この二人に対して恐怖だとかいうマイナスなものは抱いていない。寧ろ、暗殺というものからかけ離れた生活をしていた俺たちにとってはプロというのはかなり心強い。

それを伝えようとしたタイミングで

がららら

少し引っかかったような引き戸の音が、俺らの話し声しか響いていなかった3―Eの教室に響く。俺たち三人の視線は教卓側の教室の出入り口に集まった。

そこには昨日「よし、じゃあ明日早めに来てみんなで最終確認な！」と明るく言った竹馬の友がいた。

「はよー……ってウワーッ！磯貝が知らない美形たちに囲まれてる！

え、待って待ってめちゃくちゃ可愛いね君！名前は？何が好き？どこ住？髪の毛めっちゃツヤツヤじゃーん！ＬＩＮＥやってる？」

「あ、前原おはよう。」

挨拶から三言目でナンパに入っている。本当にブレないな前原。

「お触り禁止！」

「ぶべらっ!?」
間髪入れずに脳天へ鉄拳制裁。
一応俺も統也を宥めはするものの、相手が相手なのでまぁ因果応報かなぁとそこまで強く止める気にはならなかった。
「統也、私まだ触られてない。
ごめんね。褒めてくれてありがとう。ええっと名前は俵木宵で、好きなのは睡眠と食事で、住んでるのは」
「宵さん。この手の質問には、多分指折りしながら真摯に答えなくても大丈夫だと思うぞ。」
「え、そうなの?……磯貝君が言うなら、わかった。」
暗黙の了解ってやつなんだね。難しいね、人間関係って。と深刻そうに宵さんが眉を潜ませながら言う。
多分真面目な子なんだろうけど、その受け止め方のスケールは少々大き過ぎじゃないかな。
正直、あのモードの前原の言動をここまで真っ正面切って真摯に受け止めてくれる宵さんってかなりの天然か超大物なんじゃないだろうか。
ふとそんな彼女を見て、岡島と対面させていいものかと不安が過った。岡島は悪いや

つじゃないけど、怒らない子を選んでやっている節もあるから場合によってはエスカレートするんじゃなかろうか。
「あは、姉さんが可愛いのはすっごく分かるけど、明確な下心を持って口説くのはＮＧだからね～！はーい、僕を通してくださ～い！」
「あだだだだ！あああ、頭、頭がかち割れ痛だだだだだ!!」
「割れない割れない。ちょっとだけ頭蓋骨のつなぎ目を刺激してるだけだし。」
「それ力加減によってはつなぎ目からバッカリいくんじゃん!?」
「いったらいったでアナタはそれだけのことをしでかしましたよ～っていう神様からのありがたいメッセージじゃない？」
「メッセージの伝え方がそれじゃあもう取り返しつかねぇじゃん!?」
「神はいつでも残酷なんだよ。」
　……過ったが、速攻で統也が前原の後ろに回り込んで側頭部の一点をギリギリと挟み込む光景を目の当たりにして不安が吹っ飛ぶ。あんな過激なボディーガードっぷりを見せられたら「まぁ、大丈夫か」という気になってしまった。
　二人の初対面とは思えないほどの賑やかさに、自然と笑いが零れる。
「やっと笑った。」
「えっ」

「ずっとどこか表情が強ばってたから。君は正直な人なんだね。」
宵さんが6個目の『ＭＩＤ　ミニマムおフランスパン』を開けながら言った。
俺はそんなに笑っていなかったろうか。両手で軽く口角を上げたり下げたりしてみる。確かにこうやって触ってみると、無意識に力が入っていたようにも感じる。
宵さんに気にさせるほど無意識とはいえ緊張が顔に出ていたのかと思うと、何だか申し訳無い気分だ。
「なぁに?それ。」
と宵さんが俺の真似をしているのか、同じ様に自分の口角をやわやわと上げ下げしていた。
その姿が、妹と弟がもっと小さい頃に絵本に出てきたラッコの顔マッサージの絵を真似している時の様子に少し似ていてまた笑ってしまう。
「えっ、なに。」
口角を両手で挟んだまま、宵さんが眉を寄せて怪訝そうな顔をする。しかし、ラッコのマッサージをしながらそういう表情をするせいで、全く緊張感が生まれない。
「あーっ!磯貝てめぇ!俺が妨害されてる間に美少女と抜け駆けしやがって!」
「抜け駆け!?磯貝くん、一体どういうことさ!」
「え、いや!そんなつもりは!」

「ううっ、ひどい人！僕とは遊びだったのね！」
「わー！抜け駆けの上に二股なんてイケメン委員長の風上にもおけないやつめ！覚悟！」
「それは一から十まで濡れ衣！ちょ、やめ！」
悪ノリし始める統也とそれに軽率に乗る前原、そして謂われのない尋問をされる俺。
そんな阿鼻叫喚の様を、宵さんは（よほど気に入ったのか）ラッコマッサージをしながら静観していた。

磯貝と呼び出し

統也と前原の悪ノリは続き、壁に掛けられた時計にして3分程度しか時間が経っていないにも関わらず、俺は内心かなり疲れていた。

宵さんの方はいつの間にかラッコマッサージの手を止めてパンの咀嚼に戻っている。

俺の視線に気付くと「えっと、いる？」と空いた方の手で未開封のパンを勧められたが、そういう事ではないので丁重に断った。もう既に十分貰っているし。

「やだ奥様。あたし達よりも随分と対応が丁寧じゃありませんこと？人によって態度が変わるなんてやらしいざますねぇ。」

「あらやだ奥様。あのふんわり柔らかジェントルマン式お断り術でどれだけのレディをキラーしてきたんでござぁましょうねぇ。」

するとまた統也と前原が悪ノリをしはじめた。……疲れる。

「すまん、失礼する！」

そんな中、視界の端で勢いよく教室前側の引き戸が開く。

元より俺たち四人しかいないので、焦りを多分に含んだその声は３０人近くが過ごすこの教室に大きく響き渡り一気に視線を集めた。

そこには防衛省の烏間さんが、心なしかいつも以上に眉間にしわを寄せて立っていた。

突然の出来事に俺達は固まってしまったが、烏間さんの方はこちらを見てやっと見つけたと言うように僅かに目を見開いた。だが、その後俺達が見慣れた硬い表情に戻る。

「防衛省の烏間だ。転入生の俵木統也と俵木宵だな。」

「……誰。」

「カラスマ、カラスマ……。あぁ～！確か現場指揮の責任者さんだっけ。あはは。そうですけど、何かご用です？」

間髪入れずに問いかけた宵さんの言葉は先ほどパンを勧めた時と打って変わって、怒気とも緊張ともとれる堅さを持っていた。

それを遮るように、統也が前原と肩を組んだままで明るい声色で答える。

統也はこの展開を予測していたんだろうか。その表情に一切の戸惑いが見えない。

「……二人に話があって探していた。ここではなんだ。ついてきてくれ。」

「はーい。」

「はい。」

そういってくるりと退室した烏間さんの言葉に、前原の肩から手を下ろして統也が扉に向かう。

宵さんの方も半分ほど残ったパンを袋に戻し、口を折り返してスポーツバックに戻して席を立った。

「え、え？なになに。何であんなに烏間さん、急いで入ってきたんだ？」

先程まで統也と一緒になって騒いでいた前原の方は、突然の烏間さんの登場に戸惑いながらこちらにこそこそと話しかけてきた。

烏間さんが何故二人を探していたのかについては、確証はないけれど二人が政府に依頼されてやってきたプロであるというところに関係するのかもしれない。

殺せんせーにも俺にもバレているならいずれ全員も知ることになるだろうし、これは前原にも言うべきかと思い口を開こうとした時。

俺は背中にぴりりと弱く、しかし確かに電流が走ったような感覚がして統也の方を向いた。

……いや、先程のことを考えれば、俺は統也の方を向かされたのかもしれない。

扉に向かう時に前原の後ろを通ったほんの一瞬。呼吸をする間も無いほど短い間のはずなのに鮮明に焼き付いた。

僅かに細められた瞳。睫毛の影がかかった緑色の瞳がこちらをみている。

それは先程盗み見て、そして思わず見惚れてしまった宵さんの横顔と同じで。正反対な要素が多いとはいえ、ここで二人の血の繋がりを見つけた気がした。

その目のまま、統也は笑みを形作った口に人差し指を当てていた。
お願いという体をとりながら断ることを許さない、そんな柔らかくも脅迫めいた表情。
しっかりと意味や目的を持って俺に向けられたいわゆる『語る』視線。この点においては、先程の宵さんの目とは真逆だった。
「さあな。一応転校初日だし、政府の方で何かあるんじゃないか。」
すんなりと罪悪感もなく、嘘ではないが本音でもない言葉が口から出てきた。別に元々統也からも宵さんからも、プロだということは秘密にして欲しいと言われていたわけじゃないのに。
あの統也の表情で、こうせねばいけないと俺は思ってしまっていた。
なるほど。統也の言うとおり、これは確かに自分を信じられなくなりそうだ。
幸い、さっき「宵ちゃん！後で連絡先なー！」と宵さんの方に視線が行っていて統也に背を向けていた前原は統也のあれに気が付かなかったみたいだ。
「しっかし、こんな時期にここに転校してくるなんてあいつらも災難だよな。せめて茅野と同じくらいに来たんなら、まだああやって初日に呼び出されるようなこたぁ無かっただろうにさ。」
「うん、そうだな。」

前原のこの言葉に、俺は更に統也の『誠意』の重さを感じた。
哀れかな、今の俺は嘘を付いてしまったのは統也のせいだと自覚しているのに、防ぐ手段もなければ統也を責める気も全く湧かない。
「……ところでさ、磯貝。さっきの宵さんが食べて半分残ってたパン、美味そうだったからついうっかり食べちゃったって言ったら許してもらえっかな？」
……別ベクトルで哀れだなぁ。

私とカラスマさん

教室を出て扉を閉めた後。

磯貝くんをあんまり良いように使うんじゃない、という意味を込めてトウヤの右手の甲を抓る。

統也の方はこれに対して烏間さんの手前騒ぎ立てることはしなかったが、抓った部分をさすりながらの苦笑いで返された。

烏間さんが校舎を出て用具倉庫の前に私たちを連れてくる。手には二つの銀色に光るアタッシュケース。

私にはトウヤほどの観察眼はない。

トウヤみたいに身なりや動き、言葉の癖などの些細な情報からどんな性格でどんな趣味趣向を持っているのか、どんなスキルがあるかを明快に言語化して導き出すことはできない。

だけど殺し屋の端くれとして、向き合った時に対象の危険度が大なり小なり分かることがある。

その判断基準は私自身にも掴みきれておらず、無意識下での感覚的なものに依るがこ

れがどうして割と当たる。
そんな鋭利な感覚が身についてしまうくらいには対人の経験を積んだつもりだ。積んでしまった、つもりだ。
烏間さんを見た時、一瞬『やれない』と思ってしまった。
信じられないことに殺せんせーと対峙した時以上に、私の感覚がこの人は危険だと告げていたのだ。
別に烏間さんが殺気を放ったり威嚇行動を行ったわけではない。こちらに敵意は向けていない。なのに殺せんせー以上に、ダイレクトに『やれない』と分かった。
防衛省と名乗ったということは、烏間さんは味方にあたるのだろう。
私の場合、単独での仕事の遂行が多いので今までそこまでの実力者が味方陣営にいたことは無い。大抵それほどの実力者は、ターゲットかターゲットを守護する障害のような立場にいた。
それ故に味方という立場に実力者がいることに逆に安心しきれず、統也ほどこの人と言葉のやりとりをする気にはなれなかった。
「君たちの編入予定日は四日後のはずだが。何故既に編入を終えている。」
「げぇっ、バレるの早ぁ。まだ始業もしてない朝方なのになんで分かんのさ。」
「こら、質問に質問で返すな。答えろ。」

ちぇーっ、とわざとらしく口を尖らせてトウヤが自分の頭の後ろで手を組む。
「正式に学校の方に手続きは済ませてますよ？政府の方で全部やってもらうよりも戸籍取得日に自分でやっちゃった方が早いと思って、独自に色々進めさせてもらってました。」
「編入手続きは必要書類も多い。君たちだけでどうやって」
「学校側が、本物、を求めたのは戸籍だけでしょう。」
「……。」
悪びれずにトウヤが言ってのける。
こういった仕事に関する交渉事や事務手続きは、こういった二人での仕事でも私単独の仕事でも基本的に統也に一任する形にしている。
特に交渉については、結果で動くものは大小さまざまなれども、方法自体は人と人での言葉のやり取りだ。
それなら私よりもトウヤの方が向いている。
「いくらそちらの方が早いとはいえ、勝手にこちらが把握していない行動をとってもらっては困る。」
「この早期の編入は仕事の成功率上昇の為でもあります。四日前に潜入すれば、チャンスが増える分達成の確率は上昇。

加えて、今回のターゲットは世界ぐるみで国家機密にされていて情報がごく僅か。弱点らしい情報に関しては皆無です。それなら、早入りして少しでも情報をかき集めるべきだ。

つまりは地球存続のために僕らはサービス早入り残業してるわけです。ほら日本人、サービス受けるのって大好きでしょう？」

「ただより高いものは無い、とも言う。一体何が目的だ。」

「やだなぁ、そんなに眉間にしわ寄せて疑わないで下さいよ。本当に邪なことは何もないですって。」

トウヤが両手を頭ほどまで上げて降参のポーズをとる。

先程よりあからさまでは無いものの、口角を軽く上げるくらいの笑みで。

「……はぁ。仕事に対する意欲が高いのは買うが、俺達も君達の動きをある程度把握しなければ迅速な支援が出来ん。

例えば、これだ。」

ため息の後に烏間さんが二つのアタッシュケースを私達それぞれに一つずつ差し出す。

「おっ、何？追加報酬？」

「違う。」

差し出されたケースのうちの一つを受け取る。あまり重くない。
開けてみると、そこには緑色のナイフが四本入っていた。
トウヤが受け取ったアタッシュケースの方には銃と小さな弾がたくさん入ったプラスチックの容器が入っている。
「君たちにも人間には無害だがヤツにのみ効く銃と弾、そしてナイフを支給する。その特殊繊維で作られた衣服のプロトタイプよりも特殊物質の配合純度が高い分、ヤツへの殺傷効果も高いはずだ。他の皆にも同様の物を配っている。」
取り出してみると、刃の感触はゴムに近くよくしなる。刃にあたる部分を手の甲に当てて軽く滑らせてみるが、肌は全く切れていない。
人間には無害、というのは本当らしい。
「うひょー!·最先端技術を使った武器を無償配布だなんて、随分太っ腹ですね。ナイフも弾も、頼めば追加分支給されます?」
「ああ、なにせ地球存続の危機だ。こちらが出せるものは全て出す。」
「刃に当たる部分以外にターゲットが触れた場合でも、破壊は可能ですか?」
「ああ、持ち手部分に至るまで全て特殊素材で出来ている。」
「……なるほど。」
私の質問に烏間さんが首をしっかり縦に振って淀みなく答えた。

　つまり殺せんせーに対しては触れさえすればこれは殺傷力を持つようだ。それなら武器として使うだけでなく、地面においてトラップにしても良いかも知れない。
「どうだ、やれそうか？」
「今聞かれたって、僕らが現状破壊できたのは触手一本きりですよ。すごく悔しいけど、自信を持ってはいとは言えませんね。」
「反応速度から胴体視力まで、本当に地球外レベルです。どうやって完遂しようか思案しています。」
　そうぼやいた瞬間、烏間さんの目に驚愕の色が見えた。
「まさか、君たちはヤツにダメージを与えたのか!?」
「いやいや確かに与えたは与えられましたけど、たった一発だけで目的から移動ルートまでほぼ全部見破られましたよ。
　こちらが生徒である限り危害は加えないって話じゃなきゃ、１００％こっちが殺られて終わってるレベル。完全敗北。」
　突然の烏間さんの驚愕故の気迫に若干押されながらトウヤが答えた。
　トウヤの言うとおり、触れることが出来たのは初撃のみ。更に分析される隙も与えてしまっていたのだ。これを完全な敗北と言わずになんと言おうか。
「……ヤツは最新鋭の戦闘機でも傷一つつけられなかった怪物だ。それの体の一部を切

り落とす事に成功しているとは、さすがだな。」
「なるほど。となると、仰々しいのは逆効果なのかもしれないですね。」
「今後は他の暗殺者の投入や3年E組の生徒に実践的な訓練も行っていく。その際には君たちに助けを乞うこともあるだろう。
こちらの都合に付き合わせてしまっているが、彼らは学生だ。本来歩むべきだった学校生活に障ることはしたくない。君たちも、生徒となった以上は同様だ。共にヤツを殺せる様によろしく頼む。」
「……。」
「りょーかいです。」
驚いた。共に、というその言葉には悪意も皮肉も混じっていなかった。
トウヤとあの人以外から、こんなに澄んだ言葉を聞いたのは久しくて
背中がぞわりとした。

烏間と双子

『3年E組への外部からの暗殺者と情報屋2名の投入日に関して学校側と政府側で食い違いが起きている。学校側によると編入日は本日とのこと。至急確認。』

そう上司からの連絡を受け、予定より随分と早く出勤をしてアタッシュケースを両手に隔離校舎までの山道を進んだ。

ケースの中には予備として手元に置いていた分の対超生物用ナイフと銃、弾薬。本来ならば発注をかけて検品の上真新しい物資を送付してもらうのだが、今回のように迅速な受け渡しが優先される以上は致し方ない。

特に今日は通常の業務に加えて、理事長に明日からの件で挨拶に向かう予定も入っていた。余計に時間が惜しい。

予定日前にトラブルを起こした、今回作戦投入される外部人員二人。

片方は「影」そのものではと噂される程に接近及び接触に長けた暗殺者。近接戦闘にも長けているため、権力者から豪傑までその暗殺可能対象は幅広い。

もう片方は高い潜入技術と観察眼で得た希少性・有用性・信憑性共に高い水準の情報を売買する情報屋。数多の高難易度依頼を尽く成功させてきており、政府も何度か彼に

依頼を出していると言う。

両者共に確かな実績があり、何より一般人が見ても違和感なく生徒に紛れる事の出来る年齢だと言うことで今回この投入作戦にて真っ先に名前が挙がったとのことだ。

俺自身もこの作戦の指揮官として彼らの情報を確認した際に異論は無かった。

触れられないターゲットに対して、接触に長けた暗殺者。

情報が少ないターゲットに対して、観察眼に優れた情報屋。

基礎的な動きが身についていない一般の生徒達に対して、同年代の近接戦闘に長けた人物。

気配や殺気のコントロールに慣れていない一般の生徒達に対して、同年代の潜入技術に長けた人物。

ターゲットに対しても元から在籍している3年E組の生徒達に対しても、現時点でこれほどまでに理にかなう人員も中々いないだろう。

そう思っていたが。

確かに作戦に開発協力している研究所の1つから、対超生物物質繊維を使用した服飾品が試験目的で支給されているとは聞いていた。しかし、それでは破壊力の面で心許ない。なにせ以前交流した開発陣の若い研究員からも「溶解自体は可能だが、既存のナイフや弾薬に比べて純度が低いため溶解の速度が圧倒的に劣る。」と直接報告を受けてい

た品だ。スピードが自慢のターゲットに対して速度が既存品よりも劣る、という欠点は致命的だろう。

「触手を一本破壊した」

だから、その言葉を聞いた時は大変驚いた。最新鋭の戦闘機ですらヤツに傷一つ負わせることは出来なかったのだ。それを装備のハンデを背負いながら成すとは。

本人たちはかなり不服そうだったが、これは我々にとって大きな前進だ。触手破壊の実績を持った生徒として長い時間3年E組に留まる彼らが今後投入予定の兵器や装備、そして暗殺者と連携することで作戦成功率は格段に上がるだろう。

今回直接言葉を交わしてみて感じた。彼らは優秀ではあるが決して従順ではない。特に情報屋、俵木統也の方は。口ぶりから察するに、今回のこの騒動の首謀者は彼だ。

しかしその行動には彼らなりの意図があった。それが依頼の完遂ひいては若い彼らの身と生活を守ることに繋がっていたと、そういう事なのかもしれない。

ただ従順なままでは自らが破滅しかねない。これは社会においても通ずることだ。特に殺しを依頼するような、そんな人間と取引するような世界では。

だから今回の件について、俺は深く咎めることをやめた。

それに今の彼らは守られるべき立場の『生徒』でもある。そして俺は明日から名実共に彼らの教師だ。……生徒の自発的な行動は、きっと称賛されるべきものだろう。

だから。

共にヤツを殺せるようによろしく頼む。

私たちと自己紹介

「……そろそろ朝礼の時間か。丁度いいタイミングだ。磯貝くんと前原くん以外のクラスメイトにも挨拶をしにいこう。」

学生としての生活に障ることはしたくない、という烏間さんの言葉は本当だったようで一般生徒との顔合わせになる朝礼の時間には私達を解放してくれた。

服飾品以外の専用装備を今日受け取るとは思っていなかったため、ベストの下のインナーベルトに指していた護身用で携帯している2本のうちの1本、手の平サイズの金属製ナイフを抜いて特殊素材のナイフの取手を通してみる。……うん、金属製のものより持ち手のサイズは大きいけれどホルダー部分がゴムだったので何とか携帯できそう。

左に軽量の金属製ナイフ、右に比較的重量のある特殊製ナイフと左右のバランスが僅かに釣り合わなくなるが大きな差では無いし活動する分には問題ないだろう。

「ヤツに金属製のナイフは効かんぞ。ふざけた話だが、体内で全て解けてしまうらしい。」

「ですが、人間相手には頂いたナイフは効きません。壁などへの刺突も金属製の方がやりやすいです。」

「……もし暗殺に生徒を人質に取る方法や危害を加える方法を思案しているのなら、それは許可しかねるぞ。」

「いいえ。単純に選択肢を増やすためです。不測の事態に陥った際、使用できる得物の種類が多い方がその分状況突破の可能性は高くなります。その時には一芸に秀でた者より、器用貧乏の方が生存率が上がる。」

視界の端に鮮やかな緑。

目を向ければこちらにトウヤがいつも通り薄い笑顔を浮かべて手を出していた。入れ替えたナイフだけじゃない。これは、話を寄越せと言っている。

持ち手側を向けて、抜いた方の金属製ナイフを手の平の上に置くようにして渡す。握ったのを確認してから手を離せば、トウヤがあははといつもの笑い声を発声してから口を開いた。

「僕達の界隈って治安悪いんですよ〜。大抵は互いに不可侵なんですけど、同業者ってだけで潰しに掛かってくるとんでもなく元気の有り余ったヤツだっている。まぁ同業者を潰してもそいつの顕示欲が満たされるだけで仕事上の大したメリットも無いから、同業者潰しする殺し屋で息が長い所はあんまり聞かないけど。でも、遭遇してしまった場合は対処する他ない。ちょー面倒だけど。

そんでもって、これからはここに色んな僕らの同業者がやってくる。僕の見立てだと

殺せんせーを殺すのは随分と骨が折れるから、よりどりみどりかなりの人数が投入される。そして姉さんは評判の良い、異名を持つ殺し屋。」

「……つまり、その金属製ナイフは主に血気盛んな暗殺者への迎撃が用途だと認識して構わないな。」

「ビンゴ！流石ですねぇ！」

ベルトに引っ掛けていたホルスターと銃の隙間に金属製ナイフを滑り込ませてから、トウヤが烏間さんににぱっと大きく笑いかける。

トウヤには大した反応返さず、烏間さんは小さく溜息をついてから再び歩き出した。私達もそれについて短い廊下を歩いていく。

教室を前にするとより輪郭を持つ人の気配。鼓動、布擦れ、足音、物音、話し声。狭い空間に混ざり合っているがこの感じだと、ざっと２，３０人くらいだろうか。……今からこの空間に入ってそれだけの人数の目に晒されるのかと思うといつもよりも身体が強張る感覚がする。いけないいけない。

大丈夫、つい先程までいた場所だ。初めて赴く空間ではない。

「入室の合図をしたら入ってくれ。」

そう一言だけ私とトウヤに告げて、烏間さんが教室に入っていく。烏間さんが教室に入ると、足音や話し声は止んでそれぞれの意識が一本化していっていた。多分、入室し

た烏間さんに向かっている。

「おはよう。既に知っている者もいるかもしれんが、今日からこのクラスに二人編入してくる。早速だが紹介しよう。入ってくれ。」

ここは木造故に扉が閉まっていても音が聞き取りやすい。烏丸さんの入室合図で統也が教室に足を踏み入れる。おぉ、という声と各々の意識の揺れる気配。左側の生徒たちの顔を見ないように、私は緑のパーカーの背を見つめながら教室内にまず一歩を踏み出した。

「……!」

突如として背中側から突風が起きる。

右肩と左脇腹の辺りに違和感を感じて自分の体を見てみると、大きく『本日の主役です』と印字された白と赤のタスキが私と統也にかかっていた。……なんだこれ。

殺風景だったはずの木造りの教室にも、赤やら青やらの色とりどりのリボンや花を模したような丸い飾りが散見される。私から見て右手側の黒板にも「☆★☆ようこそ☆★☆俵木宵さん☆★☆俵木統也くん☆★☆」と星マークがチカチカと目に痛々しい横断幕が掲げられている。

いや、突風と目にも留まらぬ状況変化を考えると、これらは殺せんせーの仕業である可能性が高い。そして私に掛かっているこの素材のものは布が擦れた音が鳴りやすい。

つまり、これはまた私が攻勢を仕掛けた時に感知しやすくするためのものだと考えられる。

「ようこそ3年E組へ！ほらほら皆さんも新しい仲間に向かって明るく大きな声でせーの、ウェルカーム！」

「うるさいぞ！はしゃぐなターゲット！」

前を見ると、先程までいなかった殺せんせーが姿を現している。触手に持った小さなクラッカーを弾かせながら3人ほどに分身していた。こちらにクラッカーを向けていないため、殺傷目的での運用ではなさそうだ。

そうか、マッハ20ともなると鮮明な残像であたかも分身したように見せる芸当も可能なのか。これは少々厄介かもしれない。

殺せんせーの鳴らしたぱーんという追加のクラッカーの音と、それを飲み込む程の烏間さんの怒号が教室に響き続けている。あ、トウヤにクラッカーから出てきた紙吹雪がかかった。

「え、めっちゃかっこい～！」

「美男美女って感じだね。」

「俺らの誰より殺せんせーが喜んでら。」

目視した分では男女混合、計26人。教室外で感知した人数と同じくらいだ。

笑顔も散見されるし、それぞれの反応は概ね好意的なようだ。先程話した磯貝くんと前原くんにも笑顔が見られる。磯貝くんは少々困ったように眉尻を僅かに下げているが。前原くんと目が合うと、彼の瞳孔が少し開いて少々だらしない笑顔でこちらに手を振ってきた。そしてそれを見た左側の女子が、前原くんの頭を叩いて制していた。あの子、良い反応速度だ。

依然として騒ぐ殺せんせーに対して、烏間さんの眉間はシワが更に深くなって青筋も浮かんでいる。随分な興奮状態だ。

「……今のターゲットに敵意は無さそうだよ。単純にこういうお祝い事が好きなだけみたい。」

「……。」

殺せんせーと烏間さんに大半の意識が向いている中で、トウヤが私の方に声を潜めてそう言った。言葉の外で「考えすぎ」と多少バカにされた気がしたので、トウヤの白い髪に引っかかった原色ばかりの紙吹雪を強めに払う。「縮む縮む!!!」とトウヤは小さな声で喚く。なんて器用な。更に気に入らない。「理不尽の気配がすいだだだ!!!」

「あーでもほら。思ったより、賑やかで楽しそうだよ。ここ。」

「そっか、良かったね。」

「ええ〜!めっちゃ他人事!」

「あの～……。殺せんせー、二人の自己紹介とかって……。」
窓際二列目の水色の髪の、恐らく男子が少々言いづらそうに手を挙げながら殺せんせーに進言してきた。自己紹介、先程トウヤが磯貝くんにしてたみたいなアレを私がやるのか。そう思うと入室前のあの感覚が蘇ってきた。
「にゅやっ!?いやはや先生としたことが、少々はしゃぎ過ぎてしまいました。それではお待ちかねの……レッツ、ウキウキ自己紹介ターイム!
そうですねぇ、それではまず廊下側の宵さんの方から自己紹介をどうぞ。ご自身の名前と好きな食べ物なんかを皆さんに伝えてください。」
シンとした空気が部屋を包む。その中で３０人近い人間の意識を一身に受けて、私の動きが待たれていることをありありと感じる。……それをこんなに心細く感じるのは、きっと私にはこういった経験が浅いからだ。喉が閉じて固くなっているのを感じつつもそのままの状態で発声をする。
「……わ、ら木宵です。よく食べてるのはパンと白米、あとパスタかな。」
（全部炭水化物だ……。）
（朝食は何派なんだ……。）
「うんうん、全身のエネルギーがもりもり湧いてくる素晴らしい好物たちです。よくできましたね。」

殺せんせーが弾んだ声でくるりと黒板側を向いて触手の先の三本指でチョークを掴んだ。同空間で私以外の対象が動き、それに伴って私一人に集まっていた意識が分散したことで思わず小さく息をついた。

カッカッカッと黒板には読みやすい字で「俵木宵」と私の名前表記を書いていく。関節は無いはずなのに、よくあそこまで安定して字を書けるものだ。

「ではお次は」

「はーいはーい！俵木統也でっす！」

僕達二人、政府から依頼を受けて皆と一緒に殺せんせーを暗殺するために送り込まれました。さっき殺せんせー暗殺しようとしたのに、失敗しちゃって落ち込んでます～。

僕が情報サポート、姉さんが実戦って感じだから気兼ね無く接してね～！」

殺せんせーの進行を遮るようにして、トウヤが自己紹介を始めた。

トウヤのよく響く声が非常に明るく私達二人の素性を語っていく。

「……。」

「……。」

「……。」

「いやいやいや気兼ねしかねぇよ!!!」

「笑顔でするカミングアウトじゃねー!!!」

少しの沈黙の後、騒がしくなった生徒たちの声。その中でもトウヤはあっはっはと微塵も気に留めていないかのように笑顔を浮かべている。

烏間先生は目を見開いて。殺せんせーは黒板に名前表記を書いた時と変わらず、口角を上げたままの何とも読みづらい表情で。……まるで予想内なのだとも思えそうな表情で。

渚と双子

「はーいはーい！俵木統也でっす！

僕達二人、政府から依頼を受けて皆と一緒に殺せんせーを暗殺するために送り込まれました。さっき殺せんせー暗殺しようとしたのに、失敗しちゃって落ち込んでます～。

僕が情報サポート、姉さんが実戦って感じだから気兼ね無く接してね～！」

最初は儚げで綺麗な顔の男の子だと思った。同じ転入生の俵木宵さんに何かを話して頭をぐりぐりされてたから身内なのかなとか、仲が良くていいなとかそんな風に感じていた。

……けれど、彼がはいはーいと注目を集めた瞬間にそんな儚げな印象は霧散した。

ぺかーと効果音が付きそうな程の明るい後光を背負って、俵木トウヤくんはブンブンと両手を大きく振っている。そんなに広い教室では無いのに、それはもうドーム公演かってくらい大きく。

名前すら口にしていないそのタイミングで儚いというよりも、とにかくめちゃくちゃ明るくて良い子そうだという印象に変わっていた。

そう。良い子そうだと思った途端に、続けてこの爆弾発言が投下されたんだ。

「……。」
「……。」
「……。」
頭の処理が滞った。発言と表情が何にも噛み合ってない。
いやいやいや。
いやいやいや。
「いやいやいや気兼ねしかねぇよ!!!」
「笑顔でするカミングアウトじゃねー!!!」
爆発したように教室の方々からツッコミの嵐が巻き起こる。
いや確かに殺せんせーの暗殺のために送り込まれた刺客と言われると、時期とか二人も転校生がE組に纏めて来るところとかあらゆる違和感がほぼ全て解消されるけど！
その情報はその表情とテンションで言うことじゃないでしょ!?
驚く僕達に対して俵木くんはあっはっはと、この揺れる空気を気にしていないかのようにパーカーのポケットに手を入れて笑っている。これは大物だ……。
「だって一度暗殺に失敗してるから殺せんせーには僕達が刺客だってバレてるし。皆のことは政府からサポートよろしく～ってされてるから、僕達の素性分かってた方がサポートされやすいだろうし。」

素性が分かっていた方がサポートされやすいというのは、まぁ確かに。同じ内容のアドバイスでも、言う人間の実力とか実績によって納得しやすくなるのは本当だから。仮にピアノを習うとして、世界的ピアニストからのアドバイスと趣味でピアノを弾いている人では世界的ピアニストからの言葉の方が価値あるもののように思えるだろうから。

……だとしてもその納得の裏付けとして機能するべき暗殺者やら情報屋という肩書きは、あまりに僕達の日常から飛躍したものだ。しかも同年代。

そこまで考えて、ほんのちょっとだけトウヤくんが初っ端にカミングアウトをした理由が分かった気がした。そうだ、同年代だからこそなのかもしれない。例えば僕達が最初から烏間さんの言葉を素直に聞いたのは人柄もあるかもしれないけど、まず第一に烏間さんが年上で政府の人間だって肩書きがあったからだ。同年代で共に重ねた時間の少ない彼らが、限られた時間の中で僕らを暗殺という非常的な部分でサポートする。それを効率的に達成する上では、最初から素性という名の実績および発言の裏付けを開示する方が都合が良い……のかもしれない。

本当はもっと理由があるのかもしれないけど、僕程度が考え及ぶのはこのぐらいだった。

「この二人の技術は本当に素晴らしい。実際に暗殺を実行された先生が言うんですから間違いありません。同年代の二人から暗殺に関する知識や技術をどんどん学んで、二人

もこの教室でありとあらゆる事をどんどん学んでいってください。まぁ、それでも先生は殺せませんがね。ヌルフフフ。」
「……私達も？」
「ええ。だってここは教室で、貴方は学生なのですから。」
殺せんせーが話しながら宵さんの名前の隣に「俵木統也」と名前を書いていく。
宵さんは僅かに目を見開く。逆に統也くんは一瞬僅かに目を伏せた、ような気がした。……いや、自信はない。だって直前あんなに明るい笑顔だったのもあるし。彼の白い睫毛は光によく溶け込むから、黒板の前に立つ殺せんせーを見る横顔だけの今の状況ではすぐに見失ってしまう。
「そして皆さんも学生！というわけで、残りの朝の時間は皆さんお待ちかねのワクワク質問ターイム！転校生二人にバンバン質問をして、二人のことをバンバン学んで行きましょう！」
そういって先生は表紙にデカデカと【質問したいこと】と書いてある辞書ぐらい厚いとんでもなく分厚いメモをすごい速さでめくっている。
「いや、お前が質問するんかい!!」
「どうみても一番お待ちかねだったの殺せんせーだよね!?」
「そのメモ帳軽く１００ページ位あんじゃねぇか!!」

「残りの朝の時間で全部聞けるわけねーだろ!!」
またもや巻き起こるツッコミの嵐と、殺せんせーへの一点集中攻撃。
というところで、僕の上からひらりとメモ用紙が落ちてきた。たぶんこれ、殺せんせーの手元にある【質問したいこと】のメモ用紙だ。マッハの勢いでめくられて、耐えきれなくなった分がこうして離れていったのかもしれない。
少しだけ立って、メモ帳の端を右手で掴む。よし、捕まえた。
「渚、なんて書いてある?」
茅野も身を乗り出してメモの中身を見たそうにしていたので、少し体を寄せて一緒に見てみる。
『屋台の焼きそば派かカップ焼きそば派か』
聞いてどうするの!?
「……もしかして、あのメモの中身って全部こんな感じなんじゃあ。」
「……十分ありえる。」
苦笑まじりの茅野の言葉に同意する。うーん……このいい質問が浮かばないことはあとで弱点メモにメモしておこうかな。念の為。
メモはこれ以外にも何枚か舞っていたみたいで、教室の前の方にいる烏丸さんもキャッチしたメモを見て眉間にシワを寄せながら何とも言えない表情をしている。

……内容は分からないのに、内容のくだらなさは容易に想像できるのはなんでだろう。
「ううっ……。先生だって質問したいことの百や二百あります！
ですが確かに今は君たちの時間ですから、先生は涙を飲んで諦めます……。ええ諦めますともぉ……。」
部屋の隅で触手で平仮名の「の」を書きながらいじける殺せんせー。
ぐすぐすとハッキリ聞こえるから、全然涙を飲めてないことが分かる。……正直質問タイムがあの焼きそば並みにくだらない質問だらけになるのはゴメンだったから、これで良かったのかもしれない。
……でも、殺し屋と情報屋に質問か。一体何を聞けば。それは他の皆も同じみたいで、直後に手が挙がることは無かった。
「俺からいいか？」
そんな中で最初に手を上げたのは磯貝くんだった。その姿には、じわじわと空気を侵食していた遠慮や戸惑いみたいなものは無くてどこか頼もしい。
「同じ苗字で同じ学年の俵木ってことは、二人は双子でいいんだよな？」
「え。」
「そ～！見た目は残念ながらあんまり似てないけど、ちゃんと同じ所の同じ人から産まれてる姉弟。宵が姉、統也が弟！僕は宵のことを姉さんって呼んでるし、その辺はすぐ

に覚えられると思うよ～！えへへ、ありがとうね。」

小さく宵さんが何か言った気がするけど、直後に意識は回答した統也くんに全て移った。最後に磯貝くんに向けて行ったウインクが妙に印象に残った。うーんなんでだろう。統也くんの西洋っぽいその顔立ちに、ウインクがよく似合っていたから……なのかな？

「……はい！」

「はい！そこの子！」

次に意を決したように手を上げたのは倉橋さん。その勢いのままにすかさず統也くんが倉橋さんを指す。

「二人の好きなもの教えてほしいな～！」

「僕の一番好きなものは姉さん！あとはね～昆虫とか会話とか！あ、ゼリー飲料とかも！好きなものいっぱいあるんだ～！姉さんはスパイスカレー開発するの好きだよね。」

「え、そうなの？」

「あんなに色んな香辛料買って連日違う配合で作ってたんだもん。好きなんだなって思ったよ。それとも自分で他に思いつく？」

「いや、特に思いつかない。」

「ほらぁ～！」

「むっ。」
「昆虫！好きなの!?」
「うん！特にカミキリムシの幼体が好きかなぁ。」
「おお～っ！」
……妙に具体的で妙にウケが悪そうなチョイスなのが引っかかるけど、倉橋さんも統也くんも楽しそうなので深く考えないことにした。どちらにしてもついて行けそうにないし。
それにしても、宵さんは好きなものを自覚してないのか。姉さんが一番好きと発言した統也くんには最初驚いたけど、自分以上に自分のことを分かってくれる人がいるのは心強いかもしれない。……最後眉間にシワが寄ってたけど。
「はい！」
「ハイ！ハイ！ハイハイハイハイハーイ!!!」
「姉さん、どっちがいい？」
「え、私？」
次にほぼ同時に手を上げたのは中村さんと岡島くん。統也くんは宵さんにどちらを指すかの選択をさせていて、宵さんはいきなり渡されたそれに対して大きく声色も表情は変えていないけれど若干戸惑っているようだ。

「……じゃあ、男の子の方。」
「え、姉さんマジ？」
「え。」
「いよっしゃあ!!押し勝った!!!」
もうこの時点で分かる。岡島くんもろくな質問をしなさそうだ。
「是非とも宵さんのその美ボディのスリーサイズを宵さんの口から」
瞬間、岡島くんが仰け反った。
「あはは、二度目は無いよ～！」
……状況から察するに、統也くんがすかさずチョークを岡島くんに投げてそれが眉間にクリーンヒットしたみたいだ。一番好きなものに宵さんを上げた直後のこの質問、無謀を通り越していっそ勇敢にすら思えてくる。
「ギェぇぇ!!!痛ってぇぇ!!!」
「自業自得。」
「だーから私にしときゃ良かったのに。」
「どこと、どこと、どこのスリー……？」
痛がる岡島くん。呟く片岡さんと中村さん。当事者の宵さんはそもそも質問の内容が分かっていないみたいで口に軽く手を当てながら考え込んでいる。……知らないま

までいいと僕は思うよ。

キーンコーンカーンコーン

朝の時間終了の鐘が鳴る。

最後の質問がこれで本当に良かったんだろうかと思うけれど、統也くんのカミングアウトの時のような戸惑いと警戒の混じった雰囲気は今はもう消えていた。

「すっかり打ち解けてきたようで何よりです。二人は朝に決めた席で初授業の準備としばしの歓談を。改めて、よろしくお願いしますね。」

登校した時、最後列に増えていた二つの机とスポーツバック。最初はなんだろうと思ったけれど、きっとそこが二人の席なんだろう。

「……。」

僕は手元の弱点メモを見ながら、一人覚悟を決めた。